

一視同仁生に酬ゆ

樋口 吾笑

そも／＼淨瑠璃の角力番附に於ける横綱、大關、關脇、小結等の位置及び技成は審査員の判定を基準とし、會則に隨ひ編成したものである。故に果して純正詐らざるものなりや情實纏綿の恐れなきや、また公平天地に恥ぢず、自己良心を欺かざるものなりとの確信の下に公表せるものなりや。此の超人間的の信念を以て審査に従ふ者ありとするならば、それは神明佛陀と仰ぐべく尊崇の念を捧げるのであるが。此の信念なきに於ては、採點競演會も名人會も、其他種々の名稱の下に組織されたものと雖も結局は蝸牛頭上の争ひであつて眞面目に論評すべき根據なく、ただ交際と感情の混流と見れば無邪氣な交際家、正正なる人間と敬はるゝであらう。一視同仁とは一切無差別を表白する人格者と思はれる、其の人格者が普通人間の惱み騒ぐ渦中に入りて公平不公平、理窟と不道理を論争せざ立ちどころに一視同仁の資格は消滅して、平々凡々の俗輩と撰ぶ所なきに至るであらうことを恐る。拙者が或時某所の審査會に臨み講評を托された、當時の審査員とは全然異なる立場にある拙者は不敏乍ら假令また誤解ありとしても、自己の信條を中心に講評を書き、閉會後司會者の需めに應じて審査點との對照に供した。驚くべし審査員の審査票は三日間の出會者である、一〇〇點であつた。困つたのは司會者である、之では如何と爲し難し、茲に於て採點差隔記入を要求したが分らない。「樋口吾笑の講評に照して勝手に記入せよ」との返答

である。そこで仕方なく一切拙者の採點に二三司會者の意見を加味して發表したことがあつた。之では確にインチキ審査である、以來拙者の審査會に對する信頼は全く裏切られた。若し疑ふ人あらば皆現存者なる故認めねれた。其の時拙者は審査員の意見を實したが一審査員として人間だ、營業の關係や友人としての交際には誰とも親疎あり、知つた事より知らぬ事が多いのは誰も同様である、寧ろ僕より君の方が比較的正しき公平である」との裏辭を貰ひ、拙者も苦笑を禁じ得ず引取つたことがあつた。二百の三百の如し、其他は推して知るべし。審査會の開祖、幼聲會の名審査濱村貴若翁は義聲會が組織されて、松玉、ろ十、ふんどが審査となつた時、南區笠屋町の寓居に病を養つて居た。或日偶々翁を見舞つたが、なかく病氣どころが大變な元氣、折柄貴風も席に在つたが、越路、春子、菅、大隅等の藝評が繰繰げられ審査員の眞實心得となるべきもの、數々を聞かれ、圖らずも義聲會獎勵の飛び火した。新しき審査員養成と藝聲會問題の意味に於て喜ぶべき現象ならずやと翁の胸中を打診したが、以ての外の不機嫌で「幼聲會の前途は見えた」と淋しく洩らし涙ぐんだ。其の理由を開けば貴風こそよい災難で目玉王！審査員の棚卸しとなり、娛樂會稚聲會、此花會等の審査員を蹴散らした上「ぢやによつて幼聲會は潰れる、義聲會も潰れぬ、淨瑠璃は衰亡」と明確に語つた（その席には今の豊澤小住女も侍して居たと記憶する）成るほど合點……でも豫想外れといふ事もあると思つたが、翁歿して二十年、文樂は何を仕てゐたか、近松座は没落、播重も潰滅、幼聲會の傳

統すべき貴若翁の審査精神はガラン洞、それは説明を要せざる明白な事實である。然らば日本素義の代表會たる幼聲會とは如何なる會か、いとけなき聲、拙なき技藝の持主らの會か、それは名人上手を目ざして良師を撰び、鍛鍊修養以て藝術技能の上達を期するといふのが斯の會の創立趣旨であり會名の意義である。故に幼聲で終らず其の目標は確かに名人上手を狙つて居た。次に娛樂會は幼聲會に對立せる大會であつた、趣旨は大阪に生れ大阪に育ち大阪で成熟した郷土藝術義大夫節を趣味とし、娛樂より入りて攻究發達せしめんとてし回を重ねること卅回。稚聲會も亦同様の趣旨に基きて同志を聚めた。嫩會（年梅貴光が元締）此花會、聲友會、男加女會、北聲會、北和會、船場會、上町會、南和會、眞聲會等群雄割據し恰も元龜天正の戰國時代の觀があつた、併し同好者の交友關係は極めて明朗であつて、傲岸無禮とか人を侮り辱めたるを見ず、忌はしき法律的犯罪など片鱗だもなく和やかなものであつた。それが近來は如何、逆宣傳や不買同盟、會員の除名問題など不祥事件の續出は三千年傳統の道義尊重の日本精神を傷くる恨の極みである。更に審査員の不行跡、某公の横暴が金權のために東西に瀰漫し、到る處に審査の腐敗を曝露せるが如き、昭和文化的的一大耻辱と云はねばならない。情操的修養の問題としては、不買同盟の前面に於ける風紀事件、石橋梅香君入場拒絶事件など思想險惡の證左である、車戶轟君の所謂醜態でなくんば何と名づくべき歟（未完）